銀色の牙（きば）

石原慎太郎

昭和五十四年六月二十日　初版発行

定価は、カバーに明記してあります

角川文庫

銀色の牙

著作者　石原慎太郎

発行者　角川春樹

印刷者　中内佐光
東京都文京区関口一ノ二四ノ八

発行所　株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二ノ十三
郵一〇二 振東京③一九五二〇八
電話東京(265)七二一(大代表)

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan　暁印刷・大谷製本

0193-122813-0946(0)

銀色の牙（きば）

石原慎太郎

角川文庫

1285

九竜湾に突き出たカイタック飛行場の新しい滑走路の突端が見え出した頃から風向きが北に変り、九竜半島と香港島の間が一番せばまった鯉魚門の水道で潮流に乗せられ半島側に寄せられていた越見たちの艇は旨い風を拾って滑り出した。

香港島からの吹き出しを狙って筲箕湾から岸づたいにクオリイ・ベイの懐に入っているトップグループの三艇はまだ変った風が拾えず、拾っても湾から外に出てノースポイントをかわすためには上りの反転反転をくり返さなくてはなるまい。

「Koshimi, we are lucky!」

船首にいたジューンがふり返り頬を紅潮させて言う。彼女の言う通り、一キロ以上離れていた彼我の距離が見る見る縮って来る。気ままな風はクオリイ・ベイではまだ吹いていない。先頭グループにいるマックラムが追い込んで来る越見たちを見て歯がみしているのがわかる。

「もう少し北に廻ったら袋帆を張ろう」

クルーの皆川が言った。

「これで袋帆が張れれば文句なくトップで入れるな」

言いながら越見は後を振り返って見る。彼らより風上の船はいないが、風に対して同じ方角の後方に、四つ、競走艇が見える。香港ロイヤルヨットクラブ月例のドラゴン級ポイントレース、香港島一周の競走に参加した艇が十六隻。朝方から吹いていた南西風に乗ってスタートしたが、

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

島の南岸のディープウォーター・ベイの沖を過ぎる頃から風が乱れ出し、風の変る度に遅れているものが有利に立つと言う皮肉がつづいて島の東端のコリソン岬を過ぎる頃は、スタートの時と同様、殆どの艇が雁行している始末だった。

その後風は一応東南に変って吹くように見えたが、それも水域によって風がむらでいい風道に当ったマックラムたち三隻が先頭に出ていた。

ところが土壇場に来てまたその風がふれたと言う訳だ。そして今度はその風に幸いしたのはどうやら越見たちの艇らしい。

今日一日変り易かった気象の最後の贈りもので、変った風にのって雲が低く覆って来る。雲と言うよりガスだ。風は皆川が願った通り更に北にふれ、風力をまして来た。

皆川はやがて袋帆を張る。ハリヤードとスピンポールに支えられて紫色のスピンがぽっかりと開く。灰色っぽく変って来た辺りの中で、紫色のスピンは大きな花のように鮮やかだった。

カイタック飛行場の突き出た滑走路の鼻をすぎる。

後に聞こえていた爆音が見る見るせまると、辺りの空気をゆするような爆音をとどろかせジェット頭上すれすれに着陸していく。ガスに近い低い雲の中を黒い大きな鳥の影に似た機影がかすめてすぎる。頭上を流れる灰色の中に飛行機の右翼の赤い航海燈が燃えて流れる星のようにすぎた。

「南廻りで来たPAAだな」

腕時計を見て皆川が言う。

「この風のお蔭で俺もどうやら最終便の仕事に間に合わせて頂けそうだ」
日航の香港駐在員の皆川は今日の仕事を部下にまかせてレースに出て来ている。
「クラブで一杯やらんのか」
「ああ、してもいいが、一寸飛行場へ顔を出しとこう。東商の本間氏から頼まれた荷物のことがあるのでな。王ディックがいるから問題はないが」
「マックラムの泣き面を見ながら酒を呑むのもいいぞ。あいつ、この月例のためにアメリカから新しい帆をとりよせていたのに」

「これでポイントじゃ俺たちはマックを抜いたな。ハワードと同じくらいじゃないか。この船も俺たちが乗ると結構走る。来月はジューンに言って帆をとり変えさせるか」
自分の名が出て、ジューンはいぶかるように二人へふり返る。
皆川が今言ったことを彼女たちの言葉で伝え直すと、ジューンは肩をすくめ、
「パパに言ってよ」
と言った。
「新しい帆が無くても私たち一着よ」
前を指す。クオリイ・ベイから風を真横にとって出て来ようとしているマックラムの船の鼻を圧えるように、越見たちの船はノースポイントにかかろうとしていた。
「新しい帆よりも、クルーの腕よ」

ジューンは眼をつむって見せた。

ジューンの父親のジェンスンはユダヤ系の英国人で、英国人には珍しく日本びいきだった。大学から卒業後ローマのオリンピックまで数少ない日本のドラゴンの選手だった越見をジェンスンがクラブで見込んで艇長（スキッパー）に据え、同じ頃大学で競争相手だった皆川をクルーに、そして自分と娘が交互にレースに乗った。今日もどうやらジェンスンの期待には添えたようだ。クラブハウスのテラスで、マティニのグラスを空（あ）けながら、やがてジェンスンは胸に下げた望遠鏡を覗（のぞ）いて満足気にうなるだろう。

越見は約五百メートルの差をつけてマックラムの出て来る鼻を抜いた。

「この風泥棒奴（ウインドローバリー）！」

多分、マックは両腕を挙げて叫んでいるだろう。

ノースポイントをかすめ、コーズウェイ・ベイに突き出たケレット島のクラブハウスが見えて来る。クラブハウスのテラスの吊（つ）り提燈（ぢょうちん）にとりどりの灯が点った。

コーズウェイ・ベイの港の堤防に並行に走る頃、競技委員を乗せたランチが迎えにやって来た。雁行して走るランチの中に、真っ赤なタオル地のカーディガンを着たジェンスンの姿が見える。手を振るジューンに望遠鏡を握ったまま手を振り返し、上段にいるランチの舵手（だしゅ）に下手からヨットに近づくように指している。

船と船の舷（げん）が近づくと、

「コシミ、俺を待ちくたびれさせ酔いつぶさすつもりか！」

大声で叫ぶ。なる程、ランチのサイドテーブルに空になったマティニグラスが見える。
「クラブにシャンパンが冷えてる！」
ジェンスンは胸をそらせ歯を見せて笑った。

ゴールインと同時、クラブハウスにつづく突堤にあるコミティの監視所の小さな大砲が鳴った。スタートゴールの合図に大砲は大袈裟だが、ゴールの大砲は悪い気持ではない、彼につづいたマックラムたちの耳にも聞こえたろう。
港へ入る艇へ、ヨットボーイの康少年がすぐに見て船を寄せて来る。康は頓狂な声を出して笑い、
「ナンバー・ワン」
指を一本突き出して見せた。
シャワーを浴び、ジェンスンの言った通り冷えていたシャンパンを飲むとジェンスンは引きとめたが皆川はひと足先に飛行場のオフィスに帰っていった。
間もなく続いてゴールインしたマックラムたちが次々に上って来る。レースで島を一周する内に一人でウィスキーを一本は空けると言うマックラムはシャワーで尚ほてったか、バーのあるロビーに上って来た時もう真っ赤な顔をしている。集っている仲間を掻き分け、カウンターにいた越見に向って突きすすんで来ると、かためた拳で胸を突く真似をして見せる。
「この風泥棒奴！」

先刻、遠すぎて聞こえなかった台詞をもう一度言った。
「あなたのニューセールも駄目ね」
横で言うジューンに、眼をむいて睨んでみせる。精一杯の皮肉で、ジェンスンに、
「提督、閣下のお乗りにならぬ時いつも戦いは勝利に終りますな」
「いやいや、余の兵は余の命じた通りに動いて勝った」
酔っぱらったジェンスンは握った拳をマックラムの眼の前に突き出し返した。

レースの競技委員から正式に順位の発表があり、クラブハウスのロビーはレースの参加者や他のメンバーでごった返した。
どこかへいっていたマックラムがまた戻って来、
「コシミ、今どんな風が吹いているかわかるか」
「さっきと同じだろう。あの風がどうやら今日の極りだな」
「ところが違う、テラスに出て見ろ、また南にふれている。全くなんて陽気だ。これはまさに日本通のマックラムは越見にしか通じない冗談を言い他の仲間を見返って笑って見せた。
その内に他のグループが還りレースの後のパーティは盛況を呈した。マックラムと同様、越見たちの強敵の一人で、今日は運悪く欠かすことの出来ぬ所用でレースに出られなかったバーニーが遅れて入って来、レースの模様を聞き質しに越見たちのところへやって来る。

越見やマックラムからひとしきり報告を聞いた後、思い出したようにマックラムに向って人差し指を立て、

「ビッグニュースがあるぞ。ハントが生きている。ウォレアイ諸島の大珊瑚礁で救出されたと言う乗務員は漁船ではなく矢っ張り行方不明だった〝ミネルバ〟号の連中だった」

その声に近くで話していた他の連中も聞き耳をたてた。

「そして生き残った四人の内にハントが入っている。あの男が筏を組んで岩礁から二百海里離れたイタラと言う島へ救けを求めに流れついたんだ。つい先刻、シドニーから来た友達にもらった向うの雑誌を読んだ。ハントは今シドニーじゃ英雄だそうな」

「ブラヴォー！」

酔っぱらったマックラムがグラスをかかげ他の連中が陽気にそれに和した。

その話については越見もすでに知っている。案外世界中のニュースから遠くて遅い香港に比べて、耳の早い日本のジャーナリズムがそのニュースを捉え、外電とその写真を特集しグラビヤに組み込んだ記事を彼も昨日か前々日、日本からとどいたグラビヤ雑誌で見たばかりだ。尤もその中にこのクラブのメンバーだったハントと言う男がいたことは見逃していた。ハントと言う男については余り見知りがない。同じクラブでも相手が外洋用のクルーザー級のマニアのせいだったろう。

ハントは約三か月前、九竜の古い造船所チョイリイで造られたアーサーロブ設計の五十五フィートの新艇〝ミネルバ〟号に乗って香港を出た。新艇の持ち主の住むシドニーまで回航のために

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

だ。船には船主やハントの他に九人の乗組員が乗っていた。

香港を出、五日後マニラに着き、翌々日マニラを発ってその後、〃ミネルバ〃は完全に行方を絶った。無電の設備もあるが、どの土地も船もその後〃ミネルバ〃からの電信を受けとっていない。

シドニーまでの行程はたっぷりとって一月半と見られていたが、二月たっても到着がなく、現地では香港に連絡し、慌てて捜索が行われたが〃ミネルバ〃が香港を発ってから三か月を越す最近まで全く何の手がかりもなかった。

一説には、フィリピンの南部海域に多い海賊に襲われ船を沈められ全滅したのではないか、とも言われていた。

それが十日近く前、ニューギニア北方、約千三百キロのウォレアイ諸島中のイタラと言う小島に二人の男が筏で漂着し約二百キロ南方の大岩礁に漂着生存している他のクルーのいることを報せたのだ。

島からの打電が次々に中継され、フィリピンとオーストラリアから救援の飛行機が飛んだ。

岩礁に残っていた生存者は発見され、救援物資が投下され、二日後到着した大型の飛行艇に救出された。が、その間に、島に残っていた二人の内一人が救急の手を待たず疲労で死亡していた。

遭難者の救出は全くその生存限界ぎりぎりのところで行われたと言える。筏で漂着した人間にしても、島での生活がいよいよ限界に来、勇を鼓して救けを求めに出たのだが、島に漂着した時、筏が座礁した暗礁から島まで僅か一マイル泳いで渡る間に力つきた一人が水中に没して死んでい

る。

しかしいずれにしろ、遭難の後、流れついた大洋のただ中の何もない珊瑚礁の上で彼らは約八十日生きつづけてきたのだ。

救急の飛行機が撮った写真の載ったグラビヤ雑誌を越見は見たが、その写真の一枚には、茫々ただまっ平な大洋の上にそれ自体が薄い筏のように浮んだ大暗礁があった。岩礁自体の高さが水面から高いところで殆ど二メートルもあるまい。ただその幅が広いだけだが、いずれにしろ海が荒れれば珊瑚礁全体が波に洗われ水中にも没しよう。

眺めたところ一本の木も、草もない。荒い珊瑚礁故に海藻すら少ない。ただその薄べったい岩礁の上に、彼らの生存の拠点となった、嘗て大戦中日本軍が使った半分木造の五百トン近い輸送船の残骸がある。

残骸と言っても、嵐に乗って座礁し、それ切りに置き去られたらしく、比較的原型をとどめている。越見の見たグラビヤ雑誌には、彼らが伝えたその日本船の名前だか戦時船舶の統制番号だかが記されてあった。

僅かな火種を元に彼らはその日本船の木をはがして火を燃しては海水から飲み水を作り、暗礁の蔭で僅かに採れる貝、海藻、魚を料理して命をつないだ。後に筏を作ったのもその船の木板からであり、その道具も船の内にあったものを使った。僅かに船に残っていた食糧も勿論食った。

横倒しになった輸送船の船腹に飛行機に向って手を振る男。その横に、死んだまま捨て切れずに置かれた仲間の屍体の写真を越見は見た。そして、潮の干いた時、岩礁の中に僅かある砂浜の

砂地に、毎日欠かさず記されたＳＯＳの砂文字を。
更に最後に一枚、救出の後再会し抱き会って喜ぶ三人の遭難者の中に、バーニーにそう言われれば二、三度見たことのあるハントを見たような気もする。
いずれにしろ、南海の鳥も通わぬ孤礁に、三月近くを生き延びて助かったと言う人間の話は、同じヨットの仲間として興味が持てたし、彼らを救けたもののひとつが計らずも残されてあった旧日本軍の遺産だったと言うことも、日本人としてまんざら関りのない話でないような気もする。
「ともかくハントが帰って来たら俺たちとしてもそれは大歓迎だな」
「俺はあの男と握手して、あいつについていた悪魔を少し分けてもらう。お前に今日ついてた日本の悪魔に勝てるようにな」
マックラムが言った。

頃を見て帰りかけた時、玄関に近いボーリング場から声がかかった。
スティーヴンだ。ヨットに限らず越見の親しい遊び仲間の一人だ。香港にあるスポーツカークラブで知り合い、彼の紹介でヨットクラブのメンバーにもなった。
香港にある大抵のクラブのメンバーだ。自ら音頭をとって、レディスキラークラブなるものを本当に作ってもしまった。去年のマカオのグランプリレースでは乞われて越見は彼のアストンマーチンのクルーで出た。二周目には彼に頼まれて越見がハンドルを握り、三周目には目の前でロタスが引っくり覆るのを見て彼が止めようと言い出して止めた。車も命も壊して喪くするにはま

だ早いとスティーヴンは言った。
その癖、住んでいる香港には誰よりも不満で、ひと昔前の香港の乱脈を懐しがる筆頭だ。
仲間を離れ近づくと、片眼をつむり、
「おい、今夜いくだろう」
「どこへだ」
「ジョニイ劉に会ったか」
「いや、今日は一日中レースだった」
「OK、彼を探して会ってくれ。彼は君を待ってる。俺も君からの連絡を待っている」
「何だい」
声をひそめ、
「この前やった秘密パーティだ。今夜また、宝山ロードのどこかであるそうな。劉のところへ急に報せが来た。連れていく女は三人分、ジョニイ劉が揃えてくると言ってたが」
越見は一月近く前、レパルス・ベイに望んだ中国人の金持の家であった秘密のパーティを思い出して見た。
世間ではいろいろ言うが、風紀に関してひどく官憲のうるさい香港では東京の猟奇に及ぶようなものはとても許されない。人に隠れて何かしても、噂の早いこの街ではすぐ人に知れ小うるさい新聞が書きたてる。従って香港の金持たちの天国は飛んで数時間の東京と言うことになる。
尤も、そうそう東京まで出てことをかまえる訳にもいかず、気の合った連中が集って何か企み

はするが結局面倒で実際にするのは香港の夜をもの憂くかこつと言うことになる。

ところへ越見の会社の香港支店で現地雇用の社員のジョニイ劉からある金持がやると言う秘密パーティと称する集りの報せがあった。

もともと劉はただの社員ではなく、自分でやっている小さな商事会社の取引き上の都合のために越見の会社に社員として籍を入れている。まだ四十前で、結婚はしているが仕事のためにあちこち外地を歩いて遊びには眼が肥えていた。外来者の越見にとっては、仕事の上だけではなく、その他の面でいろいろ有益な協力者でもある。

越見の知らぬところでどんな繋りがあるのか知らぬが、ジョニイ劉は英国人も含めて外国人が入りにくい中国人同志だけの世界のいろいろな情報に凄く早い耳を持っていた。

競馬場ですれ違った中国美人に眼をこらすと、訊ねなくてもあれは誰それの娘、或いは二号、三号と正確に教える。たといその時わからなくても、次の日には必ず調べてあった。

他人のもちものだけではなし、本土から逃れて来た、難民ではなく、向うではある地位も身分もあった女たちが、結局食っていくために金持相手に春をひさぐ商売を始めると、すかさず劉の耳に入って来る。したがって越見や他の仲間たちは彼のお蔭でいつも珍しい、質のいい買いものが出来た。

その劉に誘われていったのだが、レパルス・ベイのその別荘であった秘密パーティなるものの印象は余りいいものではなかった。

行われたことはどこの国でもそうしたパーティでは行われる種類のもので、着いたばかりのフ

ランス版の猥映画、全裸を見せると言う素人の少女、それに日本のあるところなら浴衣がけで見られる男と女のあの実技だ。

越見もあちこち長い外国暮しで、そうしたパーティは幾つか知っていたが、集りが面白いのはそれからであって、前座に刺激され集った客たちがその後どんなことになるかがパーティの主眼なのだ。

ところが、香港のそれはそれで終りだった。大体が、そうしたショウを眺めている客たちの様子が、他のどこの国とも違って何とも陰鬱で一向に湧き上らない。

集っているのは殆ど中国人ばかりだが、最後のその衣服をすてて全裸になる少女を眺めて、その瞬間座の間にはっきりした何の動揺もない。聞こえるのは手にした盃をすする音くらいで、薄暗がりの中にただ矢鱈に淫靡な微笑と、互いを計り合うように行き交う視線があるだけで、今まで他処でそんな集りの経験がある越見は何故か初めて素ッ裸になっているその娘に後めたいような気持ちになった。

惨めなのは素ッ裸になり、連れて来た人間に言い含められ性器が見易いようなポーズをじっとしている少女で、声もなくからみついて来る視線にたまらずすすり泣きをし出した。

つき添いも、少女が客たちの気に入らないのかと錯覚し、叱るように少女に引っ込んで着させようとすると、席の後から甲高く鋭いがおよそ陰気な声が咎めるように何か言った。つまりもっと見せろと言うのだ。男は慌てて頷き涙を流している少女に何か言ってポーズを変えさせた。

その瞬間、越見は声のした暗がりに、と言うより部屋全体に向って怒鳴りつけたい衝動に駆ら

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com